

## 保育者養成における「保育内容 音楽表現」指導の方法について

Methods for Teaching ‘Musical Expression in Child-care’  
within Care-worker Training

武 岡 真知子

TAKEOKA Machiko

## I はじめに

新しい時代に沿った教育改革は保育現場や保育者養成の過程において、その趣旨に合わせて様々な取り組みがなされ、今日に至っている。保育者養成の音楽指導の立場から、保育内容「表現」領域より音楽指導内容について今日まで見つめ直し、検討を重ね、そのあり方を追求してきた。保育内容「表現」は子どもの感性を育て、表現する意欲を養い、創造性を培うという観点から設けられた領域である。保育者には、子どもに音楽の楽しさを伝え、感性と表現する意欲を養い、それらを培うことが期待されている。保育での音楽指導内容は、現場の保育者の児童への音楽観、音楽的力量に左右され、幼児の生活全般の中で子ども達との音楽的相互交渉で行われている。

しかし、これまで、子どもの発達と表現について、特に音楽的分野は押さえが弱かったといわれている。

子どもの音楽的発達は幼児期の全般的特徴と同様順次進展していくが、その発達段階にはやや独自の特徴がある。特に、発声器官の発達と

関連している歌唱もその一つである。子どもが歌うことは自己を表現する大切な手段であり、豊かな感性も養われる。その特徴を捉え、学んでおくことは保育者にとって必要である。

また、子どもは生活の中で、音楽遊びを通して人と触れ合う機会を持ち、互いの感情や意志を表現したり、共に楽しんだり、共感し合うことで、豊かな感情や表現力、調和のとれた精神を培っていくことができる。このことから保育には、現代に不足しがちな人との関わりを持つ力を音楽遊びの中で育成し、発達段階に応じて表現力や感受性、豊かな創造性を培うことを目標とすることが求められる。

このように、子どもの育ちにとっての音楽の意味や、生きることの中に音楽がどう位置づいているのかを、十分に保育者は理解しておくことが必要である。

以上を踏まえて、保育者養成の音楽表現指導の方法を考察した。

## II 保育者養成における音楽表現指導への探求

子どもの自発的、主体的な音楽活動を促すには保育者養成において学生が自ら学習し、楽しく表現しながら総合的に音楽体験ができる授業形態にしていく必要がある。「教え込む」型から脱皮しないと、本来の「表現」の本質と重ならないのである。つまり、保育者養成の音楽指導内容のあり方が、保育現場の子どもの表現活動に影響を及ぼすと考える。音楽での表現意欲は、自発的で楽しい音楽体験に基づいて生まれるものであり、保育者自身にその体験がないと子どもに本当の楽しさを伝えることができないと考える。

また、子どもの育ちにとっての音楽の意味や、幼児期の音楽表現への理解及び発達過程を保育者は十分に把握しておくことが必要であり、保育養成の音楽指導者はこれを探求し、指導に当たらなければならない。

### 1. 創造的音楽学習の試み

今も課題として試行錯誤しながら探求し続けているが、以前より実践を試みてきたのが、「創造的音楽学習の試み」(本学紀要24:11-17,1989)である。主体的な音楽活動の取り組みができる授業形態に、創造的音楽学習の場の設定を試みてきた。音楽を通して創造性を育てるということは、音楽を通して自己表現し、音楽の喜びや、深い感動を呼び起こさせ、豊かな情操を培うことである。生き生きとした音楽表現を展開するには、自発的で、個性や創意が活かされた音楽活動がなされなければならない。保育者養成で、学生が自分で考え、自分で判断し、自分で表現することができる、創造的音楽学習を体験できてこそ、将来保育に携わった時に音楽を心から楽しめる子どもを育てることができると思う。

### ・器楽表現における今までの取り組み例

保育者養成の課程における音楽的基礎能力向上の為には、一般的にピアノの習得が重視されている。ピアノは習得基礎楽器としては欠かせないが、学生のような音楽的能力を考えると、一芸偏重にならないよう留意し、各自の能力を認め生かし合う場を設定する必要がある。そこで、グループによる器楽合奏を行ない、創造的に音楽を表現する力を培うことで、深く音楽を理解し、音楽の楽しさや喜びを感じることができると考察した。ここでのグループでの器楽合奏は、自由に楽器を編成し、編曲しながら互いに協調し、学生同士の学び合いの中で、無限の創造性の広がりを見せる。中には、踊りやストーリーなどを取り入れるなど、様々な形態の演奏によるものもある。既成の楽器にとらわれない、色々な音作りや、物語のイメージに合った音楽作りで、動きのある、創造性を生かした多面的な要素を持った器楽合奏である。学生の音楽体験は、多種多様で、一人ひとりの感じ方や思いは異なるが、よりすぐれた音楽体験を通して、いっそう音楽のよさを理解する。授業を指導型から学習型へと移行し、学生を主体的に活動させることによって、心から音楽好きに変える事が今日の基本的方向であると思う。

器楽合奏の特徴は、歌と比べて音色が多彩で、高さ、長さ、強さにおいて表現に巾があることである。歌ほど言語での直接的表現はできないにしても、器楽合奏を通して色々な楽器の音色、音量などの表現効果を味わったり、あるいはその表題に合わせて楽器の組み合わせを選択したり、合奏を工夫することは学生の音楽感覚を豊かにし、理解力を深め、音楽への興味を増すことになる。木琴、鉄琴、アコーディオン、リコーダー、ピアノ、管楽器、打楽器などのそれぞれの楽器の特徴や、表現効果を経験

して、音のいろいろな構成を感じ取る力や表現上の工夫を学ぶことは、その他の領域では経験できないことである。

このように楽器を表現媒体とする器楽を経験させることは、楽器を演奏できるようにすることだけではなく、総合的な音楽性を養うのに役立つのである。楽器を演奏したり、聴いたりすることで、音楽への興味が強く刺激される。楽器が出す音に心を引かれ、美しいと感じるのは人間の生来的なものである。共に音楽を表現することにより、協調性や音楽の鋭い感受性を培うことができる。

## 2. 幼児期の音楽表現への理解

### ・表現遊びで豊かな感性や表現力を育む

昨今、ことばや表情などの自己表現が苦手な子どもが多く、このことが将来人と関わる力や社会性に影響するといわれている。このことから、幼児期に自分の意思や感情を豊かに表現したり、相手の気持ちを感じとることを十分に経験することで、コミュニケーションや社会性を養うことが重要である。幼児期は、人生においてももっとも自由にのびのびと自己表現できる大切な時期であり、自己表現ができる環境を保障してあげることで、人と関わる力や社会性が身につく、豊かな感性が育つ。

最近は特に表現遊び、ふれあいあそびが大切であるといわれる。このような経験はやがて子どもの自己表現力の基となるので十分に経験させたい。音楽的表現の育ちに大切なのは、子どもと保育者の関わり合いである。子どもが表現したものを共感し、受け止めることで子どもの心は満たされ、この経験を重ねることで感性や表現が豊かになっていく。受け止める側の感性も大切に、感受性をいつもフレッシュにし、子どもの表現をありのまま受け入れたり、いろい

ろなことに敏感に反応して見せたりすることも大切である。そのためには保育者も固定観念に縛られない柔軟な姿勢で、豊かな想像力をもって応じることが必要である。

保育者が子どもに優しく語りかけたり、歌いかけたり、乳児の泣き声や喃語に答えたりする愛情豊かで温かい関わりが、子どもの情緒の安定に繋がり、ことばや豊かな感性を育てる。感性は人間性、生き方の全体に関わり、知性を育てる根幹を成すものである。人間形成の基盤となる大切な時期に何がどのように育つのか、また、その手だてを探り理解しておくことが保育者に求められる重要な役割である。

## 3. 幼児期の歌唱への理解

### ・歌唱で育つもの

幼児期の歌唱は、表現力を育成するだけでなく、歌の美しさや楽しさを味わうことで、豊かな感性や情操の芽生えを育む。そのためには、歌詞の内容を十分に感じ取り、心から表現したいという自発的欲求を持たせ、歌いたくなるような感動を、できるだけ多く持たせることが大切である。

歌には子どもが健康で幸せに育つようにという作詞・作曲者の願いが込められており、優れた歌には子どもへの愛情が感じられる。日本の今までの童謡には日本人の心が歌われており、繊細な心や優しさ、思いやりなどが伝わってくる。歌を歌うことは、作った人の思いを感じとり、表現することである。そこには美しさ、愛らしさ、喜怒哀楽などの様々な思いが込められている。豊かな感性や自己を表現する意欲は、美しいものや心を動かされる出来事などに出会うことによって自然に出てくるものであり、歌で自己を表現することによって豊かな感性が養われ創造力が高められていく。特に季節の移り

変わりや動植物など自然を歌った歌は、深く子どもの心に感動を与える。

#### ・幼児の発声器官の発達への理解

—調査研究を基にして—

子どもの表現は、様々な諸能力の育ちに支えられている。歌を歌う場面でも、身体的成長に支えられていたり、歌の習得過程においては、環境や人間関係が影響している。幼児の歌唱は、心身の発達と平行し発達していくが、その発達段階にはやや独自な特徴がある。その過程を知っておくことは、歌唱指導において必要であると考え、以前に調査を行った。(日本保育学会36:論文集254-255, 1983) (日本保育学会39:論文集194-195, 1986)

富山県内の幼稚園児800名を対象とした3年間の声帯調整能力の発達の記録である。この調査により、幼児期の発声器官が未発達であり、著しく発達する時期でもあることが分かった。

この調査の研究目的は

- ① 声域幅と年齢的発達
- ② 声の高さと年齢的発達 (幼児の声の出る音の高さの範囲)
- ③ 男女の声域の違いとその年齢的発達
- ④ 環境練習による声帯の発達の違い

であり、これらの調査結果や、その調査段階における体験時に感じたことなどにより、歌唱の指導方法や意義などを考察した。

調査結果では、幼児の声帯調整能力は、楽しく歌っていくうちに自然に発達していくが、歌うことを好まない保育者の担当した子ども達は、3年間の声帯発達の伸びがあまり見られなかった。また、歌う頻度数を多くすれば、声帯は確実に発達するかというと、自主的に心から楽しんで歌っていないと、その効果はあまり見られなかった。このことから、保育者自身が歌うことが好きでなく、保育の中で歌う活動が少

ないと、幼児の声帯の発達が遅れるということが分かった。

#### ・幼児の歌唱とことばの関係

—調査研究を基にして—

歌ほど表に現れないが、話しことばにも、リズムや旋律のような抑揚を内在している。話し方にはリズムや抑揚が必要であり、それが乏しいとことばとしての表現力に欠け、聞き取りにくい。特に子どもの歌は、日本語のことばのリズムや抑揚に基づいて作られているので、表情豊かな歌を通して正しい日本語や話し方を習得することが可能である。歌唱は子どもにとって音楽表現のみならず、ことばの表現能力をも育んでいるといえよう。

歌唱とことばの関係を裏付けるために、幼児期の歌唱と話し声を収録し、周波数をコンピューター「音声録聞見」<sup>注)</sup>により測定し、分析した。(日本保育学会51:論文集36-37, 1998)

基本周波数から音域を調べ、歌唱と話し声の抑揚の関連を考察し、振幅(音の強さ)の時間経過の波形変化からことばのリズムなどを分析した結果、よく歌を歌う幼児は、ことばの抑揚やリズムが豊かであることが分かった。幼児の歌うという芸術行動は、ことばの表現力を高めるのに役立っていることが確認できた。ことばの抑揚やリズムは、ことばを豊かに表現するための大切な要素であり、特に自発的な歌い方が、声帯の発達を促していることが分かった。

幼児期に、ことばの話し方の基礎(初期学習)がかなり確立され、それが大人になっても習慣として残る。この時期に、ことばのイントネーションなど特別な生得能力があるのは、言語を獲得する頭脳の柔軟性にある。ことばの発達に特に大切な時期であるといえよう。

注)「音声録聞見」分析:コンピューター NEC PC-9801FAソフト  
パソコン高速音声信号処理プログラムVer. 4  
(1991, 今川 東京大学)

・幼児期の歌の特徴

音程の不確かは、声帯機構の発達の未熟さによるもので、幼児に特有の現象である。音程の正確さを無理に求める必要はないが、話し方のことばの抑揚やリズムは、この時期に育成しないと機会を逃すことになる。

また、ことばの発達の初期の段階には、歌の選択も重要であり、歌の旋律が正しい日本語のイントネーションや日本語のリズムに合致しているものがよい。幼児期に合った歌を楽しく与えることは、複合的に大きな意義を持っている。

但し、幼児の歌い方、話し方の影響が一番大きいのは、模範となる身近な存在である保育者に掛かっている。

4. 歌唱表現等の学生意識調査

<目的>

保育者養成での音楽表現指導内容において、カリキュラムの見方、捉え方について論及するには、学生の姿抜きで考えることはできない。学生の表現への実態を把握するために、本学幼児教育学科1年生98名を対象に音楽表現の意識調査のアンケートを実施し、指導内容を考察する。

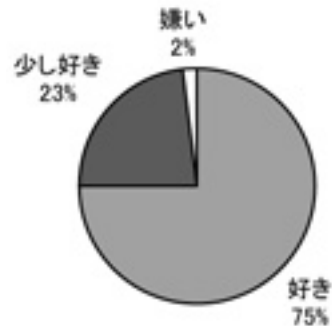
<方法>

- (1) 調査対象 富山短期大学幼児教育学科  
一年生 98名  
(内訳女子93名, 男子5名)
- (2) 実施期間 2008年1月22・25日実施
- (3) 調査方法 アンケートの実施  
(設問9 3段階評価)
- (4) 調査内容 音楽表現の意識調査

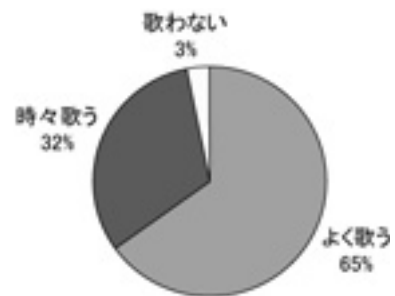
<結果>

・アンケート結果(回収率100%)

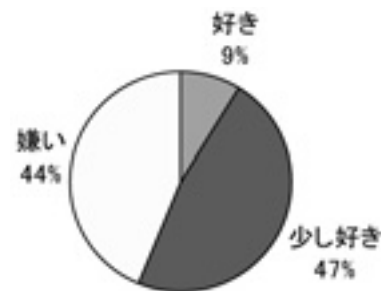
1) 歌うことが好きか



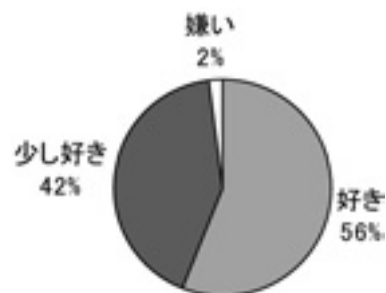
2) 歌を日常的に歌っているか



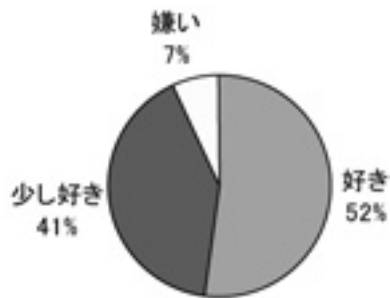
3) 人前で歌うことが好きであるか



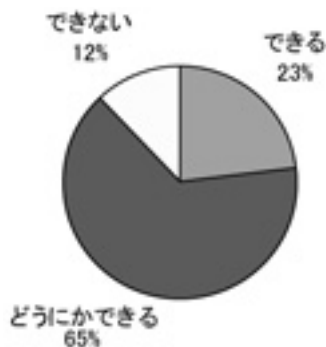
4) 子どもの歌を歌うことが好きか



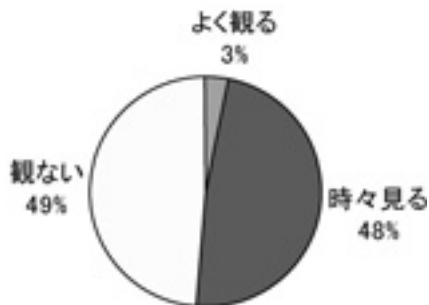
5) 歌に合わせて踊ることが好きか



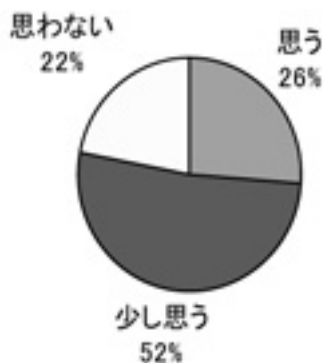
6) 人前で踊ることができるか



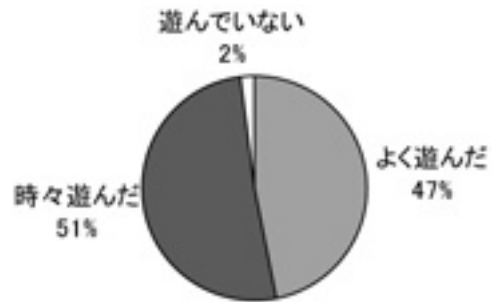
7) 劇やミュージカルなどを観るか



8) 音楽劇などを演じてみたいと思うか



9) 幼児期に手遊びや童歌などで遊んだか



<考察>

保育者養成における「音楽表現」の授業を受ける学生の実態について、調査データの分析を通して検討し、課題を把握することで指導方法を考察した。

3段階評価による「歌うことが好きか」の間1.では、75%が好きであると自認しており、歌唱を愛好する学生が多い。

問2の「日常的に歌っているか」では、65%がよく歌っており、32%が時々歌うであった。これも安心できる数値であり、保育者を志すにはあまり問題はない。

留意すべきは、問3の「人前で歌うのが好きか」では、9%の学生が好き、47%が少し好きであったが、44%が嫌いと答えていたのは予想を超えて高い数値であった。子ども達の前で歌うことが多い保育者にとってこの数値は、子どもへの影響を考えると大きな問題と考える。歌を心から楽しく歌い上げる気持ちがないと、歌の楽しさを伝えることができず、子どもに大きな影響を与えることになる。

問4の子どもの歌への愛好度は高いが、歌を楽しい歌声でいつも歌い子どもを包んでやる心構えが大切であり、子どもの創造性を引き出すためには保育者自らが感動を持って、気持ちを込めて表現することに喜びを感じる必要がある。

反面、問5、6.での踊る(身体表現)ことへの設問では、「人前でも踊ることができる」あるいは「どうにかできる」と答えた学生を合わせると88%であった。このことから、歌唱と比べて身体表現においては人前で行うことには抵抗感は少ないようである。

問7、8.においては、学生の音楽劇への観賞は半数が観ないと答えている反面、78%が劇への参加を希望し、演じてみたい意思があることが分かった。

問9)では、学生の幼児期の音楽あそびの育ちの観点から、指導内容の参考とした。この設問により、殆どの学生が手遊びやわらべ歌で遊んできたことが分かった。この体験が多い学生ほど、音楽遊びへの楽しさや、創造性が培われていると考えられる。

## 5. 表現を育てる

人前で歌うのが嫌いである学生が半数近くいたことから、このような意識を持って子どもたちに歌っても、歌の楽しさは伝わらない。子ども達の前で自信を持って楽しく歌うことができる保育者になるには、どのような方法で音楽表現指導がなされなければならないのか検討してみた。

歌唱の授業において、学生自らが感動を持ち、気持ちを込め、歌うことに喜びが感じられる内容にするには、単に歌を歌うのではなく、歌を楽しめる内容に工夫していく必要がある。例えば、歌に遊びが入っているものや、ストーリー性のある歌はイメージーションが膨らみ、楽しさが伴うので自然に楽しく歌えるようになる。さらに劇(ストーリー)にゲームが伴うものは、さらに楽しさが感じられる。また、歌うことや身体表現を一人で行うのではなく、グループで表現し合い、遊び心を持って楽しめる授業内容

に工夫していく必要がある。

このような楽しい音楽遊びを十分に体験することで次第に表現力が育ち、歌うことへの喜びや自信にも繋がる。さらに動きが伴う音楽劇遊びにも発展させることも可能である。

## 6. 劇遊びで育つもの

劇遊びを体験することで、総合的に豊かな表現力や感性が育っていく。劇を通して得た感性は人間のあり方、生き方に影響する。これは学生のみならず、子どもにも同じことがいえる。劇遊びは、創造力を育て、表現力を養い、協調性を高める総合的な表現遊びである。

子どもの劇は、見せるための劇というイメージが従来強いが、ドラマティックプレイ(劇的な遊び)として捉えられなければ意味がない。幼稚園教育要領にある「演じて遊んだりする楽しさを味わう。」という語句があるように、自由に自己表現し、自分が描いた想像の世界にストーリーが展開され、子ども自身が創りだすことばや行動が保障されることで、豊かな表現力や感性が育つ。劇遊びを通して人と触れ合う機会を持ち、豊かな感情や表現力、調和のとれた精神を培っていく。子どもは人とのかかわりの広がりの中で、他者との共感や思いやり、集団への参加意識など相互に関わりあうことにより将来の社会生活で必要とされる主体性や社会性を身につけていく。

このような人と関わる力は、自分の意思や感情を豊かに表現したり、相手の気持ちを感じ取ることを十分に経験することにより養われる。劇遊びごっこの中で、必ず起きるのがトラブルやけんかである。挫折などを経験することで、子どもは育っていくのである。

音楽あそびの中で触れ合いながら互いの感情や意思を表現したり、ともに楽しんだり、共感

し合い、人との関わりを持つ力を育成し、感受性や想像力など豊かな心が育っていくことは、子どものみならず学生にも共通する側面を持っている。学生が劇遊びを体験することは、保育者として子どもの育ちに関わる上で大変に有効である。

## 7. オペレッタへの取組み

授業では、保育に関わる様々な音楽表現活動を体験的に学ぶが、学外の発表の場として、「子どものための音楽会」を毎年行い、本学科2年生のオペレッタを子ども達に観賞してもらっている。オペレッタは楽しいストーリーの中に、子どもたちに伝えたいメッセージが込められており、台本や衣装、大道具も学生の手作りで、みんなで創る共同的な活動の中で感動と喜びが生まれる。

このような発表という目的意識の強い、楽しい体験ができるオペレッタには、音楽的能力のみならず、コミュニケーションに必要な言語能力、身体表現も発達していく。日本人はとかくコミュニケーションが苦手といわれるが、大人がそうであれば子どもにも影響する。人前で歌ったり、踊ったりすることが楽しいと感ぜられるようになるには、このような楽しい音楽体験を重ね育むことが重要であると考えられる。



オペレッタを演じ終えた学生は、「終わった時はほっとして達成感を味わっていましたが、時間が経つと、子ども達の前で演じ、喜んでもらったことに感動して涙が止まりませんでした。」と述べていた。練習段階では、他者との意見交換におけるトラブル、不安、焦り、多忙感、苦労感など、団結・協力することの難しさがみられたが、終えてみると、満足感や達成感、喜びが学生から伺えた。

また、この「こどものための音楽会」を、他大学の学生（50名程）が継続的に観賞しており、その感想レポートには、次の内容が記されていた。「オペレッタを観賞して、その楽しさ、幅広さ(可能性)、教育的な意図、更には人間のあり方など、子ども達に伝えたいことが数多く構成に組み込まれていた。伝えたい内容、表現方法を研鑽したがゆえに生み出された質の高さによるものだろう。こうした質の高い表現に触れることは、子ども達自身の表現の質や可能性を高める上でも欠くことのできない重要な要素である。それ故に、こうした質の高い表現にふれる機会を設けることに、保育者として取り組んで行かなければならない。そのことに気付けた点も含めて非常に参考となる機会であった。」（レポートからの抽出例）以上43名の感想から、オペレッタの発表は演ずる学生のためばかりでなく、他の保育に関わる人々のためにも重要な行事として位置付けられると感じた。

## III 終わりに

今日の保育者養成の音楽表現の指導の立場から、今日まで検討してきた指導内容の問題点や課題を再確認し、変貌著しい社会環境の中で育っている子ども達や学生の姿を把握することで、実状に合った音楽表現指導方法を考察し



た。

特に、学生の音楽表現への意識や音楽遊びの育ちのアンケート調査では、保育者としての歌唱における問題点が把握でき、授業をより良い方向に改善していくことが可能になり有意義であった。保育者養成校では学生一人ひとりにとって保育の本質が身に付く授業内容を提供していかなければならない。限られた授業時間の中で、最大限に音楽表現への充実した指導内容を図り、指導に当たることは、将来、子ども達に音楽の楽しさや美しさを伝えることができる保育者、感性や表現豊かな保育者として活躍できることを保障することになる。

#### 参考文献

- 1) 大畑祥子「保育内容音楽表現」建帛社  
1999
- 2) ことばの科学入門GLORIA J.BORDEN  
KATHERINE S.HARRIS 廣瀬肇訳kkメディ  
カルリサーチセンター
- 3) 武岡真知子「保育者養成校の音楽指導内容を  
考える－保育現場からの意見を参考にして  
－」(富山女子短期大学紀要29:106-116,1994)
- 4) 武岡真知子「創造的音楽学習の試み」(富山  
女子短期大学紀要24:11-17,1989)
- 5) 武岡真知子「幼児の声域について」(日本保  
育学会36:論文集254-255,1983)
- 6) 武岡真知子「幼児の声帯発達」－調査結果に  
よる歌唱指導の問題点と歌唱の意義－(日本  
保育学会39:論文集194-195,1986)
- 7) 武岡真知子「幼児の歌唱とことばの関係－音  
声録聞見」による幼児の歌唱とことばの分析  
－(日本保育学会51:論文集36-37,1998)
- 8) 別宮貞則 日本語のリズム 講談社1978  
(平成20年1月11日受付、平成20年2月13日受理)

